

## 23. 薬物依存の相談機関における薬物依存症の相談・支援の実態

雨宮洋子、小泉典章、松本清美、新井智美（長野県精神保健福祉センター）

要旨：長野県では長野ダルクが県内の薬物依存症相談において重要な役割を果たしてきたが、医療、行政での依存症の回復に向けての取組みは、必ずしも十分とは言えなかった。そこで、3ヵ年計画で薬物依存症対策推進事業を平成21年度より開始した。初年度として依存症当事者とその家族等に対する支援を検討するために、長野ダルク、県保健福祉事務所及び長野市保健所（以下保健所）、精神保健福祉センターが対応した薬物依存症相談の実態を調査し、県内の相談機関における薬物依存症の相談の実態と課題を検討したので、ここに報告する。

キーワード：薬物依存症、相談機関、長野ダルク

### A. 目的

薬物依存の相談機関である薬物依存症リハビリ施設（長野ダルク）、保健所、精神保健福祉センターにおける薬物依存症に関する相談内容と対応について実態を調査・分析するとともに、相談機関の役割を明確化し、長野ダルク等自助団体と共同した薬物依存症者の社会復帰の支援及び家族への支援体制の充実強化を図り、薬物依存症者の回復につなげる。

### B. 方法

#### ①調査対象機関

長野ダルク（以下ダルク）、保健所11箇所（県及び長野市）、精神保健福祉センター

#### ②回収期間

平成21年12月から平成22年1月

#### ③調査方法

平成18年4月から平成21年9月末までに対象機関が初回相談対応した全事例に関して、1ケースごとに相談票を作成の上、内容についてエクセルシートに入力し、電子メールにより調査した。なお、保健所については、精神保健福祉相談の伴うもののみ対象とし、精神保健福祉法に関する申請・通報（23条、24条、26条）による調査のみの対応事例は集計から除いた。

#### ④調査内容

相談者の実態を把握するために「相談の種類」、「対応職員」、「初回相談内容」、「薬物に関する状況」、「生活背景」、「転帰」等11項目とした。なお倫理面への配慮として、相談者本人の特定につながらないよう、個人に関する情報は収集しないこととした。

### C. 結果

#### ①相談の状況

##### (1)相談の種類と対応職員

ダルクが最も多く相談を受けていた。（表1）保健所では、医師、保健師、薬剤師が対応し、精神保健福祉センターでは、心理士、ケースワーカー、保健師等が対応していた。

表1 相談受付総件数、種別

	総件数	相談種別			
		電話	面接	訪問	メール
ダルク	211	164	33	12	2
保健所	35	14	18	3	0
精保センター	42	42	0	0	0
合計	288	220	51	15	2

##### (2)相談者と当事者の関係

親族からの相談、特に「親」が多かった。（表2）「関係者」の内訳は、保健所は警察、ダルクは医療機関が多かった。

表2 相談者と当事者の関係

	全体 N=288	ダルク n=211	保健所 n=35	精保センター n=42
当事者本人	79	61	6	12
親	112	81	17	14
子ども	0	0	0	0
兄弟姉妹	19	16	1	2
配偶者	18	12	2	4
他親族	9	6	2	1
友人知人同僚	29	22	2	5
関係者	22	13	5	4

##### (3)当事者の性別及び年齢、職業

74.0%が男性で、年齢は20歳代が34.0%と最も多く、次いで30歳代32.5%、40歳代11.9%で、若い世代が多く占めた。また、50.7%が「無職」であった。

##### (4)初回相談の主訴

「薬をやめたい」、「治療希望」が多かった。ダルクには「入寮希望」、保健所は「自傷他害迷惑行為」、精神保健福祉センターは「情報希望」の相談があった。（表3）

表3 相談の主訴

	全体 N=288	ダルク n=211	保健所 n=35	精保センター n=42
薬をやめたい	56	43	4	9
治療希望	66	51	10	5
入寮希望	72	70	2	0
離脱・精神病症状	16	13	0	3
情報希望	25	10	4	11
自傷他害迷惑行為	19	9	8	2
その他	34	15	7	12

## ②薬物に関する状況

現在使用している薬物は、覚せい剤が特にダルクで多く、向精神薬の使用も各機関で多かった。(図1) 使用の段階では、ダルクは連続使用状態の相談、保健所では、離脱・精神病症状に関する相談が多かった。

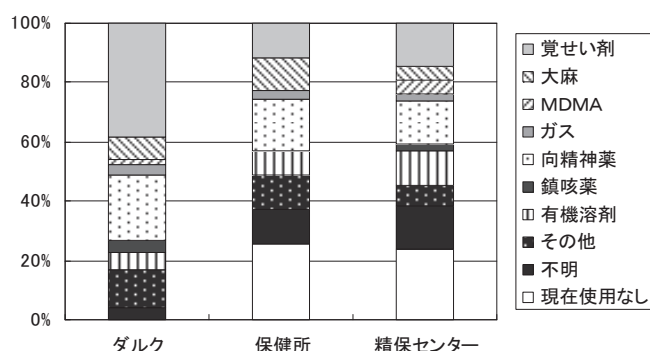


図1 現在使用している薬物の種類

初めて使用した薬物は、現在使用している薬物と異なり、有機溶剤が多く見られた。(図2)

薬物の使用開始年齢は、有機溶剤は20歳までが多く、覚せい剤は10歳代後半～40歳代まで幅広い年代に亘っていた。

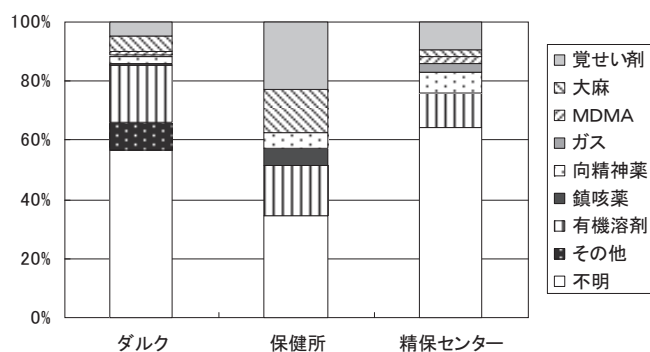


図2 初めて使用した薬物の種類

## ③相談後の対応

ダルクは68.2%が相談継続していた。紹介先として全機関で精神科医療機関が最も多く、治療希望や、離脱・精神病症状治療を目的として紹介されていた。

## D. 考察

## ①長野ダルク

様々な薬物、相談者、主訴をもつ相談を数多く受け付け、その約7割を相談継続していた。特に覚せい剤に関する相談の割合が高く、地域において覚せい剤に関する第一線の相談機関となっていた。

## ②保健所

精神保健相談や、保健師による面接・訪問等を組み合わせて対応していた。自傷・他害・迷惑行為を主訴とする相談を多く受け、警察や精神科医療機関との連携が見られた。相談件数が少ない中で危機介入が求められるため、相談対応者のスキルアップが課題である。

## ③精神保健福祉センター

広域的機関であることから、匿名性の高い相談が寄せられていた。専門医療機関や福祉制度等の情報を求める相談が多く、ニーズに対応できるよう情報把握が要求される。

## E. まとめ

今回の実態調査により、県内の薬物依存症相談の実態と、相談機関の役割が明らかになった。

今後は、相談対応に役立つガイドブックの作成に向け、相談対応事例の中から協力が得られた「回復に向かう事例」に対して、詳細な個別調査を実施し、有効な個別支援のモデル化や連携による支援のフローチャート作成を計画している。また、家族への情報提供と、薬物依存症の理解を深めるための家族向けリーフレットを作成し、家族の相談を促す契機としたい。

さらに、相談業務に関わる職員の相談対応のスキルアップを図るための研修会を開催し、関係機関が連携した地域における薬物依存症回復支援を推進したい。

## 文 献

- (1)松本俊彦：薬物依存症の理解と援助. 金剛出版. 2005
- (2)長野県衛生部：薬物依存症の相談、連携に関する実態調査報告書（平成21年度）. 2010